

蓄蔵貨幣の銀行への集積について

小 林 威 雄

周知のように、『経済学批判』第二章、および『資本論』第一卷第三章においては、単純な商品流通のもとにおいて貨幣にあたえられる諸形態規定性が考察されている。けれども、これらの二つの著作の右の二つの章においても、われわれは『資本論』の以下の諸章で展開される資本制生産、したがってまた、信用制度のもとにおける貨幣についての簡単な叙述をかなり多くみいだすことができる。これらの簡単な叙述のなかで蓄蔵貨幣にかんするかぎりにおいては、つぎのことが、すなわち、(1)「自立的な致富形態」としての貨幣蓄蔵は、ブルジョアの生産の発達とともに減少していくが、これに反して「交換過程によって直接に必要とされる」支払手段の準備金の形態における貨幣蓄蔵は、ブルジョアの生産の発達とともに増大する、⁽¹⁾(2)しかし、「社会的質料交換が震撼させられるとき」には、発達したブルジョア社会のもとにおいてさえも、「蓄蔵貨幣としての貨幣の埋蔵」、すなわち「自立的な致富形態」としての貨幣蓄蔵がおこなわれる、⁽²⁾(3)ブルジョアの生産のもとにおいては、貨幣蓄蔵は「総生産機構の従属的な一機能」としてあらわれる、⁽³⁾(4)蓄蔵貨幣の直接的形態とともに金製品の所有という審美的形態があるが、この蓄蔵貨幣の審美

的形態は、ブルジョア社会の富とともに増加する、⁽⁴⁾ (5)ブルジョア的生産の発達した段階においては、蓄蔵貨幣は、「その独自の諸機能のために必要とされる」最小限に制限される、⁽⁵⁾ (6)ブルジョア的生産が発達している国々においては、蓄蔵貨幣は「銀行という貯水池」に集積される、などのことがのべられている。

これらの資本制生産、したがってまた、信用制度のもとにおける蓄蔵貨幣について簡単にのべられていることがらのなかで、ここでとくに問題としてとりあげようと思うことからは、右の諸点のうちさいごの(6)ブルジョア的生産が発達している国々においては、蓄蔵貨幣は「銀行という貯水池」に集積される、ということである。このことについては、つぎのように叙述されている。

「純粹な金属流通がおこなわれている国々、あるいは未発展の生産段階にある国々においては、蓄蔵貨幣は無限に分裂してその国の全表面に分散されているのであるが、ブルジョア的に発達した国々においては、それは銀行という貯水池に集中される」(『批判』S.130~1, 傍点——引用者)。

「ブルジョア的生産が発達している国々は、銀行という貯水池に大量的に集積されている蓄蔵貨幣を、その独自の諸機能のために必要とされる最小限に制限している」(『資本論』第一巻、S.151, 長谷部訳、青木版二八一—二二ページ、傍点——引用者)。⁽⁶⁾

われわれは、前々稿および前稿(『蓄蔵貨幣の第一形態』について、河西太一郎先生在職三十五年記念論文集)、『立教経済学研究』第十三卷第四号所載、および『蓄蔵貨幣の第二形態』について、『立教経済学研究』第十四卷第一号所載)において、資本制生産のもとにおける蓄蔵貨幣の二つの形態、すなわち、支払手段および購買手段の準備金として「資本のうちつねに貨幣形態で現在していなければならない部分」である「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣、および「貨

幣形態で遊休し目さき失業している資本の形態」である「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣について考察したが、これらの考察においては、資本制生産のもとにおける蓄蔵貨幣を正しく理解するために、それぞれの稿の註においてことわっておいたとおり信用制度を考慮外においていた。しかし、周知のように、資本制生産の発達とともに同時に並行して信用制度は発達してくるのであるから、われわれの研究は、前々稿および前稿における資本制生産のもとにおける蓄蔵貨幣の二つの形態についての理解を基礎として、さらに信用制度を考慮にいれて信用制度のもとにおける蓄蔵貨幣についての考察に歩をすすめるなければならないことになる。

そこで、本稿においては、信用制度のもとにおける蓄蔵貨幣についての考察の第一歩として、『経済学批判』第二章および『資本論』第一巻第一篇第三章において、ブルジョアの生産が発達している国々においては、蓄蔵貨幣は「銀行という貯水池」に集積される、というさきに引用したマルクスの簡単な叙述に着目して、信用制度のもとにおいては、なぜ、蓄蔵貨幣は「銀行という貯水池」に集積されるのか、という問題について考察してみようと思う。

なお、このばあい、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣および「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣が、なぜ銀行に集積されるのかということが、もっとも重要な問題であるが、銀行に集積される蓄蔵貨幣は、たんに「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣および「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣ばかりでなく、資本の再生産過程そのものにもとづく種々の契機から形成される蓄蔵貨幣ではない、あらゆる階級の個人的な生活関係から生ずる、単純な商品流通のもとにおいて形成される蓄蔵貨幣もまた銀行に集積されるので、このことについても、さいごに考察しようと思う。

(1) 「致富の意味をもつところの抽象的形態における貨幣蓄蔵は、ブルジョアの生産の発達とともに減少するのに、交換過程に

よって直接に必要なとされるこの貨幣蓄藏（支払手段の準備金の形態における貨幣蓄藏——引用者）は増加する。というよりもむしろ、一般に商品流通の領域内で形成される蓄藏貨幣の一部分は、支払手段の準備金として吸収される」（『批判』S.142）。

- 「自立的な致富形態としての貨幣蓄藏は、ブルジョア的社会的進展につれて消失するが、これに反して、支払手段の準備金の形態での貨幣蓄藏は、ブルジョア的社会的進展につれて増大する」（『資本論』第一巻、S.138、長谷部訳、青木版二七六ページ）。
- (2) 「社会的質料交換が震撼させられるときには、発展したブルジョア社会においてさえも、蓄藏貨幣としての貨幣の埋藏がおこなわれる」（『批判』S.124～5）。

- (3) 「貨幣蓄藏がブルジョア経済でのように総生産機構の従属的な一機能としてあらわれないで、この形態の富が究極目的として固持されているアジア、ことにインドでは、金銀製品は本来ただ蓄藏貨幣の審美的形態にすぎない」（『批判』S.128）。

- (4) 「蓄藏貨幣の直接的形態とともに、その審美的形態、すなわち、金製品および銀製品の所有ということも進む。これはブルジョア社会の富とともに増加する」（『資本論』第一巻、S.139、長谷部訳、青木版二六四ページ）。

- (5) 「ブルジョアの生産が発達していればいるほど、このような準備金（支払手段の準備金——引用者）は、ますます必要な最小限にとどめられる。ロックは、利子率のひきさげにかんするかれの叙述で、かれの時代のこの準備金の大きさについて、興味ある説明をあたえている。それによると、銀行制度が発達しはじめたばかりのその時代に、イギリスでは、一般に流通している貨幣のどんなにいちじるしい部分が支払手段のための貯水池によって吸収されていたかがわかる」（『批判』S.142）。

「ブルジョアの生産の発達した段階においては、蓄藏貨幣の形成は、流通の種々の過程がそれらの機構の自由な活動のために必要とする最小限に制限される」（同上、S.146～7）。

なお、本文において、ブルジョアの生産が発達している国々においては、蓄藏貨幣は「銀行という貯水池」に集積されるということがつぎのように叙述されているとして引用した二つの引用文のあとの引用文においてものべられている。

- (6) ブルジョアの生産が発達している国々においては、蓄藏貨幣は「銀行という貯水池」に集積されているということについては、註(5)において引用したまえの引用文の後半においてもみることができぬ。

信用制度のもとにおいては、なぜ、蓄蔵貨幣は銀行に集積されるのか、という問題は、銀行がおこなう業務と密接に結びついていると考えられる。したがって、われわれの問題の解明のためには、まず、銀行はいかなる業務をおこなうのかを理解することが必要である。

マルクスは、『資本論』第三巻第五篇第二十五章において、「支払手段としての貨幣の機能、したがってまた、商品生産者と商品取扱業者とのあいだでの債権者・債務者の関係」が、信用制度の「自然発生的な基礎」(『資本論』第三巻、S.436、長谷部訳、青木版五六八ページ)をなすものであるとし、さらに、信用制度についてつぎのようにのべている。

「信用制度の他の側面は、貨幣取扱業者の発達と結びついている、この貨幣取扱業者の発達は、資本制的生産においては、もちろん、商品取扱業者の発達と歩調をおなじくする。すでに前篇(第十九章)でみたように、事業家たちの準備金の保管、貨幣の受入、払出の技術的諸操作、国際的支払の技術的諸操作、したがってまた地金の取扱が貨幣取扱業者たちの手に集中する。この貨幣取扱業者と結びついて、信用制度の他の側面、利子生み資本または貨幣資本の管理が、貨幣取扱業者たちの特殊な機能として発達する。貨幣の借入と貸付とがこれらの特殊な業務となる。かれらは、貨幣資本の現実の貸手と借手との媒介者として現われる。一般的にいえば、銀行業者の業務は、この側面からみれば、貸付可能な貨幣資本を自己の手に大量的に集中し、したがって個々の貨幣貸手のかわりに銀行業者がすべての貨幣貸手の代表者として産業資本家および商業資本家に対応することにある。かれらは貨幣資本の一般的管理者とな

る。他面、かれらは、全商業世界にかわって借りることにより、すべての貸手にたいし借手を集中する。銀行は、一面では貨幣資本の、貸手の集中を表示し、他面では借手の集中を表示する。銀行の利潤は、一般的にいえば、貸すよりも安い利子で借りるところから生ずる」(『資本論』第三卷、S. 438~9、長谷部訳、青木版五七一―二二ページ)。

この文章において、「信用制度」とのべられている言葉の意味は、前後の叙述からみて銀行制度とおなじ意味であることはあきらかである。他の箇所でも、「信用—および銀行制度」(『資本論』第三卷、S. 655、長谷部訳、青木版八五六ページ)というようにもちいられているように「信用制度はなかんずく銀行制度である」と理解される。⁽⁷⁾

(7) 「なお右のようにマルクスは『信用制度』というときつねに『資本制生産様式の形態としての信用制度』(Ⅲ、656 [『資本論』第三卷、S. 656、長谷部訳、青木版八五七ページ])を指しているのであって、たんに抽象的に、非歴史的に信用、信用制度が考察されているのではない。あるときは——とくに資本制以前を論じているさいには——『近代的信用制度』と呼んでいるが、とくに『近代的』といわなくても、扱っている信用制度は近代的、資本制的な信用制度以外のものではない。また『信用—および銀行制度』(Ⅲ、655~6)とも呼んでいるように、信用制度はなかんずく銀行制度であることが注意されねばならない(講座『信用理論体系』、I、三宅義夫稿「第一章 概説——信用理論の体系」二五―六ページ、ハ)内——引用者)。

さて、この文章によって、第一に、銀行は貨幣取扱業者たる側面をもっているということ、そして第二に、銀行はかかる貨幣取扱業と結びついて、利子生み資本の管理者として貨幣に利子をつけて預かり、これをより高い利子をつけて他に貸付ける、すなわち「貨幣の借入と貸付」を本来の業務とするということがあきらかになる。

そこで、信用制度のもとにおいては、なぜ、蓄蔵貨幣は銀行に集積されるのか、というわれわれの問題を、この銀行の二つの側面と関連させて解決に接近していくことにしよう。

まず、第一の銀行は貨幣取扱業者たる側面をもっているという面から考察する。

さきの引用文においては、「事業家たちの準備金の保管、貨幣の受入、払出の技術的諸操作、したがってまた地金の取扱が貨幣取扱業者たちの手に集中する」(傍点——引用者)とのべられており、またさきに引用した文章につづくつぎのパラグラフのなかにおいては、「銀行は産業資本家たちの金庫業者であるから、それぞれの生産者や商人が準備金として保有する貨幣資本、または支払金としてかれの手もとに流れてくる貨幣資本が、銀行の手に集中する」(『資本論』第三卷、S. 339、長谷部訳、青木版五七二ページ、傍点——引用者)とのべられている。まえの文章において「事業家たちの準備金」といわれているもの、およびあとの文章において「それぞれの生産者や商人が準備金として保有する貨幣資本」といわれているものは、いずれも「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣をいいあらわしている。(8)そこで、この二つの文章から、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣が、なぜ、銀行に集積されるのかというと、それは銀行が「金庫業者であるから」、すなわち貨幣取扱業者であるからである、ということがあきらかになる。ではさらに、なぜ銀行が貨幣取扱業者であるから、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣が銀行に集積されるのか。われわれは、ここで貨幣取扱業について考察しなければならなくなる。

(8) ここで引用した二つの文章においては、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣のみがあげられており、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣はあげられていない。したがって、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣が銀行に集積されるのは、銀行が貨幣取扱業務をおこなうということからではないということになる。あとでのべるように、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣も「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣とおなじように貨幣取扱業者の手もとに集積されるのであるが、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣が銀行に集積されるのは、むしろ銀行がたんなる貨幣取扱業者でないからである。なお、このことについては、第三節および第四節においてのべられている。

貨幣取扱業、貨幣取扱資本については、周知のように、『資本論』第三卷第四篇第十九章において考察されてい

る。われわれは、『資本論』の叙述にしたがって貨幣取扱業、貨幣取扱資本についてみてみよう。

「資本が新たに投下されるばあいのみ、またそのかぎりにおいてのみ——蓄積のばあいにもそうであるが——貨幣形態での資本が運動の出発点および終点として現象する。だが、ひとたび過程にある各資本にとっては、出発点も終点もただ通過点としてのみ現象する。産業資本が、生産部面から出てふたたび生産部面に立ち入るまでに姿態変換 $W' - G - W$ を通過しなければならぬかぎりでは、……中略…… G は事実上、姿態変換の一方の段階の結果であり、この段階を補足する対立段階の出発点であるにすぎない。また、商業資本にとっては産業資本の $W - G$ はつねに $G - W - G$ としてあらわれるとはいえ、商業資本にとつてもまた、それがひとたび働いておれば、現実の過程はたえず $W - G - W$ である。しかし商業資本は、 $W - G$ および $G - W$ なる両行為を同時に遂行する。すなわち、一方の資本が $W - G$ なる段階にあるとき他方の資本が $G - W$ なる段階にあるばかりでなく、同一資本が、生産過程の連続性のためにたえず購買すると同時にたえず販売する。同一資本がたえず同時に双方の段階にある。同一資本の一部分が、のちに商品に再転形されるために貨幣に転形されると同時に、他方の部分が、貨幣に再転形されるために商品に転形される」(『資本論』第三卷、S. 346-7、長谷部訳、青木版四四八—九ページ)。

産業資本の循環においても、商業資本(商品取扱資本)の循環においても、貨幣資本は、ただ貨幣の諸機能を果たすにすぎない。したがって、貨幣資本は、商品交換の形態いかによつて、すなわち、商品交換が現実の貨幣の提供にたいして商品が販売される $W - G$ という形態をとるか、あるいは、将来の支払約束にたいして商品が譲渡される「変化した $W - G$ 」という形態をとるかによつて、あるいは流通手段として機能し、あるいは支払手段として機能する。流通手段として機能するか、あるいは支払手段として機能するか、いずれにしても生産過程を連続的におこなう

ためには、たえず購買すると同時にたえず販売しなければならない。したがって、資本家は、たえず多くの人々に貨幣の払出をなし、たえず多くの人々から貨幣を受取らなければならない。ところで、この貨幣の払出および貨幣の受入には純技術的な諸操作がともなう。貨幣資本が流通手段として、すなわち購買手段として機能するばあいには、貨幣の払出、受入、簿記などの純技術的な諸操作が必要となるし、また貨幣資本が支払手段として機能するばあいには、諸支払金の支払、および受入、清算（決算）の諸行為・支払差額計算などの純技術的な諸操作が必要となる。

(9) 「貨幣状態における資本価値は、貨幣機能をはたしうるだけで、他の機能は何もはたしえない。貨幣機能を資本機能たらしめるものは、資本の運動における貨幣機能の一定の役割であり、したがってまた、貨幣機能があらわれる段階と資本循環上の他の諸段階との関連である」(『資本論』第二卷、S.26、長谷部訳、青木版四一ページ)。

また、「資本の一定部分はたえず蓄蔵貨幣・潜勢的貨幣資本として現存しなければならない。——購買手段の準備金、支払手段の準備金、貨幣形態で充用を待っている失業資本。また、資本の一部分はたえずこの形態で還流する」(『資本論』第三卷、S.347、長谷部訳、青木版四四九ページ)。

前々稿および前稿において考察したように、資本の再生産過程においては、必然的にたえず資本の一定部分は蓄蔵貨幣の形態において現存しなければならない。ところで、この資本の一定部分をたえず蓄蔵貨幣の形態において現存せしめるためには、払出、受入、簿記などの純技術的な諸操作のほかに、蓄蔵貨幣の保管という特殊な一操作が必要とされる。引用した文章における「購買手段の準備金、支払手段の準備金」とは、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣であるが、この「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、「たえず流動するのであって、たえず流通に流れこみ、たえず流通からかえってくる」(『資本論』第三卷、S.350、長谷部訳、青木版四五三ページ)。したがって、この「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣には、蓄蔵貨幣を流通手段や支払手段にたえず分解し、また、

販売によって受取った貨幣や満期になって受取った貨幣から購買手段の準備金、支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣を再形成するという払出、受入、保管、簿記などの純技術的な諸操作が必要とされる。つぎに、引用文における「貨幣形態で充用を待っている失業資本」とは、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣である。「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣の具体的な「資本形態」は、前稿においてのべたように、資本の再生産過程における必然的な契機にもとづいて形成される(一)固定資本の減価償却基金、(二)新たに蓄積された未投下貨幣資本、そして、一定の諸条件のもとにおいてのみ偶然的に資本の再生産過程から「遊離」されて形成される(三)「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣の「特殊の形態」としての「遊離貨幣資本」という三つの「資本形態」であるが、この「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣には、とくに受入、保管、簿記などの純技術的な諸操作が必要とされ、また、それが資本として充用されるばあいにおける払出という純技術的な操作が必要とされる。

(10) 「潜勢的貨幣資本」については、前稿一五三ページ以下の註(5)を参照されたい。ここでもちいられている「潜勢的貨幣資本」には「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣も「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣もふくまれる。

さらに、世界市場においては、貨幣資本は世界貨幣として機能するが、「世界貨幣としては、国内貨幣(Landesgeld)はその地方的性格を脱却する。ある国内貨幣が他の国内貨幣で表現され、かくしてすべての国内貨幣がその金銀内実に還元されるのであるが、この金銀は同時に、世界貨幣として流通する二つの商品としては、その相互的価値比率——これはたえず変動する——に還元されねばならない」(「資本論」第三卷、S. 320、長谷部訳、青木版四五二—三ページ)。したがって、このばあいには、払出、受入、簿記などの純技術的な諸操作のほかに、さらに両替という特殊な操作が必要とされる。

以上、みてきたように、産業資本および商品取扱資本——狭義での商業資本——の流通過程において貨幣資本がはたす諸機能は貨幣の諸機能であつて、これらの貨幣の諸機能にもなつて払出、受入、支払差額の決済、簿記、貨幣の保管、両替、等々の貨幣の純技術的な諸操作が必要とされる。したがつて、貨幣の純技術的な諸操作は、「貨幣そのものの種々の規定性から、および貨幣の諸機能——したがつて、資本も貨幣資本の形態をとれば遂行せねばならぬ諸機能——から生ずる」(『資本論』第三卷、S. 348, 長谷部訳、青木版四五〇ページ)といふことになる。⁽¹¹⁾

(11) 貨幣の諸機能から貨幣の純技術的な諸操作が生ずることから、流通手段、支払手段、蓄蔵貨幣、世界貨幣といふ貨幣の諸機能からそれぞれのような純技術的な諸操作が必要とされるかといふことについてのべてきたが、貨幣の価値尺度機能についてはどのように考えるべきであるか。このことについては、飯田繁教授があきらかにされているのでここに引用しておく。

「価値尺度(Mass der Werte)としての貨幣は、観念的な金(または銀)として機能するのであり、現実的な貴金属の存在を必要としないのであるから、この機能からは直接的に貨幣の純技術的操作は発生しない。しかし、貨幣が価値尺度として機能することに、商品価値ははじめて商品価格(観念的金量)に転形されるのであり、そしてこのように商品が価格形態に転形されることによってはじめて、貨幣は商品を購入するための流通手段としても、また実現された商品価値の蓄蔵手段としても、さらにまたあらかじめ譲渡された商品にたいする支払手段としても、なおまた国際貿易の収支差額決算のための世界貨幣としても機能しうるのであるから、価値尺度としての貨幣の機能は、けつきよく、その他の貨幣の諸機能とむすびつくところの貨幣の純技術的諸操作を間接的に規定することになる。そこで、価値尺度として機能する貨幣の金属材料が金であるか、または銀であるかにしたが、さらにまた、価値尺度としての機能によつてもたらされる、商品価値の転化形態Ⅱ価格形態Ⅱ観念的貴金属量を技術的に測定する諸価格の標準(Magstab der Preise)がそれぞれの『とき』と『ところ』に応じてどのように定められているかにしたがつて、価値尺度(および諸価格の標準)としての貨幣の機能は貨幣材料の質、量および貨幣名(価値名)などとおして、貨幣のその他の諸機能にともなう貨幣の技術的諸操作にたいし間接的影響をあたえるであろう」(飯田繁著、新訂『利子つき資本の理論』、二〇ページ)。

ところで、産業資本および商品取扱資本の流通過程において、必要とされる貨幣の純技術的な諸操作をおこなうた

めには、特殊の労働と費用とを支出しなければならない。この貨幣の純技術的な諸操作をおこなうための特殊の労働は、価値を創造する労働ではなく、したがって、このための費用は流通費である。しかし、この特殊の労働と費用の支出は、資本の再生産過程にとって必要不可欠のものであって、これなくしては、再生産が阻害されることなしに、円滑におこなわれえない。だから、「産業資本の一部分は、くわしくいえば商品取扱資本の一部分も、たえず貨幣形態で・貨幣資本一般として・存在するばかりでなく、右の技術的諸機能に従事しつつある貨幣資本として存在するであらう」(『資本論』第三卷、S.346、長谷部訳、青木版四四八ページ)。つまり、産業資本および商品取扱資本の一部分は、つねにその流通過程において必要とされる貨幣の純技術的な諸操作をおこなうための貨幣資本として存在しなければならない。このことは、産業資本家や商業資本家(狭義、以下同じ)たちが、それぞれ個別的にとりあつかう貨幣の純技術的な諸操作を、かれらにかわって専門的にとりあつかうために資本を投下する独立の特殊な資本家が登場する可能性をあたえる。かくして、流通過程にある産業資本および商品取扱資本の一部分である貨幣資本は、貨幣の純技術的な諸操作のみをじぶんの事業とする独立の特殊な資本家の機能によって貨幣取扱資本に転化する。すなわち、産業資本および商品取扱資本の流通過程において必要とされる貨幣の純技術的な諸操作のみを、じぶんの独自の事業として産業資本家や商業資本家たちにかわって、かれらのためにおこなう資本家の資本、つまり、総資本のなかから独立した貨幣資本が貨幣取扱資本となる。だから、貨幣取扱資本は、貨幣資本の姿態で流通過程に現存する産業資本の一部分が分離して、残りの資本全体のために再生産過程における貨幣の純技術的な諸操作をおこなう資本であり、貨幣取扱資本は、再生産過程のなかで運動している産業資本の自立化した一部分である。

以上、考察してきたところから、貨幣取扱資本とは、産業資本および商品取扱資本が流通過程において必要とされ

る貨幣の払出、受入、支払差額の決済、貨幣の保管、両替、簿記、等々の純技術的な諸操作をひきうけて、これらの諸操作を専門的にこなうことに投下されている資本のことであり、これらの貨幣の純技術的な諸操作を専門的な事業としていとむものが貨幣取扱業者であると規定することができるであろう。

そこで、つぎにこの貨幣取扱業と蓄蔵貨幣との関係について考察してみよう。

まえにものべたように、蓄蔵貨幣には、この機能から生ずるところの貨幣の純技術的な諸操作が必要とされる。すなわち、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣には、この形態における蓄蔵貨幣がたえず流動し、たえず流通に流れこみ、たえず流通からひきあげられるために、払出、受入、保管、簿記などの純技術的な諸操作が必要とされ、また「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣には、とくに受入、保管、簿記などの純技術的な諸操作が必要とされ、さらには、それが資本として充用されるばあいには払出という純技術的な操作が必要とされる。そして、これらの純技術的な諸操作をおこなうためには、特殊の労働と流通費である費用が支出されねばならず、産業資本の一部分は、くわしくいえば商品取扱資本の一部分も、これらの純技術的な諸操作をおこなうために従事しつつある貨幣資本として存在しなければならぬ。

貨幣の純技術的な諸操作を専門的に一手にひきうけておこなう貨幣取扱業が発生すると、これらの蓄蔵貨幣の機能から生ずるところの純技術的な諸操作は、貨幣取扱業によっておこなわれることになる。ところで、貨幣取扱業者が、蓄蔵貨幣の機能から生ずるところの純技術的な諸操作をおこなうためには、まずどういふことが必要とされるであらうか。貨幣取扱業者が、産業資本家や商業資本家たちにかわって、蓄蔵貨幣の機能から生ずるところの純技術的な諸操作をおこなうためには、産業資本家や商業資本家の手もとにある蓄蔵貨幣が、かれらの手をはなれて貨幣取扱

業者の手もとに移らなければならぬであろう。つまり、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣について必要とされる受入、払出、保管、簿記などの諸操作を産業資本家や商業資本家たちにかわって貨幣取扱業者がおこなうためには、この形態における蓄蔵貨幣が貨幣取扱業者の手もとに存在していなければならぬし、また「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣についてとくに必要とされる保管という操作は、貨幣取扱業者の手もとに、それが存在することによってのみ、はじめておこなうる操作である。したがって、貨幣取扱業者の手もとに蓄蔵貨幣が存在しなければ、蓄蔵貨幣の機能から生ずるところの純技術的な諸操作を産業資本家や商業資本家たちにかわって、貨幣取扱業者はおこなうことはできないのである。貨幣取扱業者が、蓄蔵貨幣の機能から生ずる純技術的な諸操作を産業資本家や商業資本家たちにかわっておこなうためには、蓄蔵貨幣が貨幣取扱業者の手もとに集中されなければならない。そこで、産業資本家や商業資本家たちにおいて形成される「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣および「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、貨幣取扱業に集積されるようになるのである。

三

前節においては、銀行は貨幣取扱業者たる側面をもっているということから、なぜ銀行が貨幣取扱業者であるということによって蓄蔵貨幣が銀行に集積されるのか、というように問題を提起し、この問題をとくためには貨幣取扱業とはなにかがわからなければならないので、貨幣取扱業、貨幣取扱資本について考察し、そして、産業資本家や商業資本家たちが蓄蔵貨幣にともなう純技術的な諸操作の代行を貨幣取扱業者に依頼するために、蓄蔵貨幣が貨幣取扱業に集積されるということについてみてきた。

ところで、銀行は一面において貨幣取扱業務をおこなうが、しかし、銀行はただたんに産業資本家や商業資本家たちにかわって、貨幣の純技術的な諸操作をおこなうところの貨幣取扱業務だけを独自の事業として専門的におこなうものではない。貨幣取扱業務だけを独自の事業として専門的におこなうのであるにすぎない。銀行は一面において貨幣取扱業務をおこなうが、それと同時に利子生み資本の管理者として貨幣に利子をつけて預かり、これをより高い利子をつけて他に貸付ける、すなわち「貨幣の借入と貸付」を本来の業務とする。ここで、銀行の本来の業務は「貨幣の借入と貸付」であるにかかわらず、なぜ銀行は一面において貨幣取扱業務をおこなうのか、ということが問題となる。この問題をあきらかにするためには、われわれは、貨幣取扱業のほとんどに集積された蓄蔵貨幣について検討しなければならない。そして、なおこの検討をつうじて同時に、なぜ貨幣取扱業者が銀行業者となるのか、ということがあきらかにされる。

貨幣取扱業者は、前節において考察したように、産業資本および商品取扱資本の流通過程において必要とされる貨幣の純技術的な諸操作を産業資本家や商業資本家たちにかわって専門的にとりあつかう。ところで、この貨幣取扱業者が専門的にとりあつかう貨幣の純技術的な諸操作は、商品流通の結果であり、現象形態であるところの貨幣流通の純技術的な諸操作であって、貨幣取扱業とは全く無関係に独立して生ずるものである。したがって、貨幣取扱業は、貨幣の純技術的な諸操作をおこなうだけである。だがしかし、その結果はただたんに貨幣の純技術的な諸操作をおこなうだけのものではなくなってくる。というのは、貨幣取扱業者は、産業資本家や商業資本家たちにかわって貨幣の純技術的な諸操作をたんにおこなうことによって、これらの純技術的な諸操作を集積し、短縮し、簡単化するからである。だから、貨幣取扱業は、ただたんに貨幣の純技術的な諸操作を専門的にとりあつかうことによって、たんに貨

幣の純技術的な諸操作を媒介するのみでなく、さらに、それらを集積し、短縮し、単純化する。しかし、いうまでもなく、さきへのべたように、このことは、貨幣取扱資本が貨幣流通を本来的に規定するというものではけっしてない。そこで、この貨幣取扱業のはたす役割を蓄蔵貨幣との関連においてみてみよう。

「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣には、さきへのべたように、払出、受入、保管、簿記などの純技術的な諸操作が必要とされる。貨幣取扱業者は、産業資本家や商業資本家たちにかわって、この「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣から生ずる純技術的な諸操作をおこなう。すなわち、産業資本家や商業資本家たちのもとにおいて形成されたこの形態における蓄蔵貨幣を受入れ、保管し、そして産業資本家あるいは商業資本家たちが、G—Wをおこなうさいに、この蓄蔵貨幣を購買手段あるいは支払手段として払出し、これらの受入、払出、保管を記帳する。また、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣から生ずる純技術的な諸操作も貨幣取扱業者は代行する。「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣には、とくに受入、保管という諸操作が必要とされる。貨幣取扱業者は、産業資本家や商業資本家たちが形成する固定資本の減価償却基金、「新たに蓄積された未投下貨幣資本」、および偶然的にのみ形成される「遊離貨幣資本」という形態における「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣を受入れ、そして保管する。この形態における蓄蔵貨幣は、「遊休し目さき失業している」貨幣資本である。だから、それは一定の期間、貨幣取扱業者の手もとにおいて保管される。産業資本家や商業資本家がそれを資本として充用するさいに、それは購買手段あるいは支払手段としてふたたび流通にはいるが、そのさいに必要とされる払出という操作も貨幣取扱業者がおこなう。このように、貨幣取扱業者は、産業資本家や商業資本家たちによって形成される「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣および「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣から生ずる純技術的な諸操作を代行する

だけであつて、けつして蓄蔵貨幣の形成には関係してゐない。「貨幣取扱業は、蓄蔵貨幣を形成するのではない」(『資本論』第三卷、S. 352、長谷部訳、青木版四五六ページ)。

ところが、貨幣取扱業は、このように蓄蔵貨幣を形成するのではないが、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣にたいしては、それを経済的最小限に縮小するための技術的手段を提供する。

「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、購買手段および支払手段の準備金として資本の循環の他の諸段階との関連によつて機能している貨幣資本である。したがつて、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、たえず流動して、たえず流通に流れこみ、たえず流通からひきあげられてくる。貨幣取扱業は、この「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣にともなう純技術的な諸操作を産業資本家や商業資本家たちにかわつておこなひ、これを集積し、全資本家階級のために管理する。その結果、一方では、貨幣取扱業の手もとで保管されていた「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣が購買手段あるいは支払手段として流通に流れこむが、他方では、同時に流通からひきあげられて形成された「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣が貨幣取扱業の手もとに流れてくる。だから、貨幣取扱業に集積された「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、その全部が機能するのではなく、その一部分のみが購買手段および支払手段の準備金として機能するにすぎない。つまり、貨幣取扱業に集積された「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、それぞれの産業資本家や商業資本家たちにとつては、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣、すなわち購買手段および支払手段の準備金として機能している貨幣資本ではあるが、貨幣取扱業の手もとにおいて、現実にはこのように購買手段および支払手段の準備金として機能する部分は、産業資本家や商業資本家たちから貨幣取扱業の手もとに集積されたものよりもすくなく、その一部分であるにすぎない。そこで、社会的に

みれば、貨幣取扱業の手もとには、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣として・すなわち購買手段および支払手段の準備金として・機能していない蓄蔵貨幣が、存在することになる。かくして「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、貨幣取扱業に集積され、共同的に管理されることによって、社会的には、経済的最小限に縮小されるのである。貨幣取扱業は、さきにも述べたように、蓄蔵貨幣はならん形成しないが、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣を経済的最小限に縮小するための技術的手段を提供するのである。⁽¹²⁾

(12) 「貨幣取扱業は、蓄蔵貨幣を形成するのではなく、この貨幣蓄蔵を——これが自由意志的である（つまり失業資本または再生産過程の攪乱の表現でない）かぎりにおいて——経済的最小限に縮小するための技術的手段を提供する。というのは、購買手段および支払手段の準備金は、全資本家階級のために管理されるばあいには、各資本家によって別々に管理されるばあいほど大きいことを要しないからである」(『資本論』第三卷、S. 352~3、長谷部訳、青木版四五六ページ)。

この文章において「失業資本または再生産過程の攪乱の表現」である貨幣蓄蔵とのべられているのは、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣の形成である。したがって、貨幣取扱業の技術的手段によって、経済的最小限に縮小されるのは、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣である。このことは、「購買手段および支払手段の準備金云々」とのべられていることからあきらかである。

以上のように、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、貨幣取扱業に集積され、そして貨幣取扱業の提供する技術的手段によって経済的最小限に縮小され、その結果、社会的にみれば、貨幣取扱業の手もとには「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣として・すなわち購買手段および支払手段の準備金として・機能しない蓄蔵貨幣が、存在することになる。この蓄蔵貨幣は、社会的には「遊休している失業している」貨幣資本である。

貨幣取扱業には、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣ばかりでなく、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣もまたとくに保管という純技術的な操作を依頼されて集積される。この「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする

蓄蔵貨幣は、産業資本家や商業資本家たちのもとにおいて形成された目さき失業している「遊休貨幣資本」である。したがって、貨幣取扱業者の手もとは、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣の保管のために集積された失業している「遊休貨幣資本」が存在する。かくして、貨幣取扱業者は、その業務をつづけ、かつ大規模におこなうようになってくるにつれて、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣のようにたえず流動していて、貨幣が出入りしても、それを集積し、共同的に管理することによって、その一部分はつねにかれの手もとに、社会的には失業している「遊休貨幣資本」として残り、また目さき失業している「遊休貨幣資本」である「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣も一時に引出されることはなく、さらにたえずあらたに保管される貨幣によってたとえ引出しがあつたとしてもそれに応ずることができて、たえずかれの手もとに残ることになる。これらの貨幣取扱業者の手もとに残って存在する貨幣資本は、失業している「遊休貨幣資本」であるから、かれはこれを自分の事業のためにもちいることも、あるいはまた他に貸付けることも可能であろう。しかしながら、貨幣取扱業者としては、たんに貨幣の純技術的な諸操作を専門的におこなうにすぎないから、貨幣取扱業者は、ただこれらのかれの手もとにつねに存在する失業している「遊休貨幣資本」を保管するにすぎない。

しかし、貨幣取扱業者は、たんに貨幣の純技術的な諸操作をおこなうばかりでなく、さらに、「貸付」という業務をもおこなうようになる。かくして、貨幣取扱業者は銀行業者に転化していくことになる。

貨幣取扱業者が銀行業者に転化し、発展していく過程は以上のように考えることができる。以上の考察によって、貨幣取扱業者の手もとは、集積された「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣の一部分、および「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣が「遊休貨幣資本」としてとどまり、そしてそれらは貸付可能な貨幣資本に転形され

うるということがあきらかになつた。そこで、銀行がなぜ一面において貨幣取扱業務をおこなうのかという問題にたいしては、一般的には、それは貨幣取扱業務をおこなうことによつて、銀行が自由にしうる貸付可能な貨幣資本が形成されるからである、というようにいうことができよう。だがしかし、銀行はたんなる貨幣取扱業者ではなく、利子生み資本の管理者として貨幣に利子をつけて預かり、これをより高い利子をつけて他に貸付ける、すなわち「貨幣の借入と貸付」を本来の業務とする。そこで、蓄蔵貨幣が銀行に集積される契機については、この銀行の本来の業務との関連においても考察しなければならぬ。したがつて、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣も「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣もともに、いままでみてきたように、貨幣取扱業者には集積されるが、しかし、銀行が貸付可能な貨幣資本を形成するために、貨幣取扱業務をおこなうことによつて集積される資本制生産のもとにおける蓄蔵貨幣は、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣であるか、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣であるかというところが問題となる。われわれは、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣と「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣との相異、および銀行の本来の業務は、利子生み資本の管理者として貨幣に利子をつけて預かり、これをより高い利子をつけて他に貸付ける、すなわち「貨幣の借入と貸付」であるということを念頭においてこの問題について考察しよう。

「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、まえにのべたように、購買手段および支払手段の準備金として資本の循環の他の諸段階との関連によつて機能している貨幣資本である。したがつて、この「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、その形成者である産業資本家や商業資本家にとっては、けつして失業している「遊休貨幣資本」ではない。それは、たえず流動し、たえず流通に流れこみ、流通からかえつてきて、たえず純技術的な諸操作が

必要とされる。それでそれは、貨幣取扱業に集積される。「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、貨幣取扱業に集積され、共同的に管理されると、その一部分は、貨幣取扱業が提供する技術的手段によって、社会的には購買手段および支払手段の準備金として機能しない失業している「遊休貨幣資本」として貨幣取扱業の手もとに存在することになり、それは他に貸付けることも可能となる。だから、この「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣を集積し、そしてその一部分を貸付可能な貨幣資本に転形することができるのは貨幣取扱業のみである。それにたいして、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、その形成者である産業資本家や商業資本家たちにとっても目さき失業している「遊休貨幣資本」である。したがって、この「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、それが形成された当初から「遊休貨幣資本」である。それは保管という操作を依頼するために貨幣取扱業に集積される。しかし、たんなる貨幣取扱業者でなく利子をつけて貨幣を借入れ、そしてこれをより高い利子をつけて他に貸付けるという業務を本来の業務とする銀行に「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣が集積されるのは、銀行が貨幣取扱業務をおこなうから、つまり貨幣の純技術的諸操作をおこなうからではなく、銀行が利子をつけて預かるからである(18)。(このことについては、つぎの節においてあらためて考察する)。したがって、銀行が貸付可能な貨幣資本を形成するために、貨幣取扱業務をいとなむということにたいして関係するのは、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣ではなく、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣であるということが出来る。

銀行は、貨幣取扱業務をおこなうことによって、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣にともなう純技術的な諸操作をおこない、それを集積し、共同的に管理する。そして、その結果、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣として・すなわち購買手段および支払手段の準備金として・機能しない蓄蔵貨幣(失業している「遊休貨幣資本

本)、つまり銀行が自由にしうる貸付可能な貨幣資本を形成するのである。だから、「銀行は産業資本家たちの金庫業者(貨幣取扱業者——引用者)であるから、それぞれの生産者や商人が準備金として保有する貨幣資本、または支払金としてかれの手もとに流れてくる貨幣資本が、銀行の手に集中する」(『資本論』第三卷、S. 439、長谷部訳、青木版五七二ページ)とのべられているように、銀行が貨幣取扱業務をおこなうことによつて集積される蓄蔵貨幣は、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣である。そして、銀行は集積された「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣の一部分を貸付可能な貨幣資本に転形する。かくして、「商業世界の準備金が——共同的準備金として集中するがゆえに——必要な最小限に制限されるのであって、さもなければ仮睡するはずの貨幣資本の一部分が貸出され、利子生み資本として機能する」(『資本論』第三卷、S. 439、長谷部訳、青木版五七二ページ)。銀行が自由にする貸付可能な貨幣資本の第一の源泉としてあげられているものは、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣である。

(13) 本稿の第二節のはじめの方で引用した文章、「信用制度の他の側面は、貨幣取扱業の発達と結びついている、この貨幣取扱業の発達には、資本制的生産においては、もちろん、商品取扱資本の発達と歩調をおなじくする。すでに前篇(第十九章)でみたように、事業家たちの準備金の保管、貨幣の受入、払出の技術的諸操作、国際的支払の技術的諸操作、したがってまた地金の取扱が貨幣取扱業者たちの手に集中する」(『資本論』第三卷、S. 438~9、長谷部訳、青木版五七一ページ)においては、貨幣取扱業者たちに集中される蓄蔵貨幣としては「事業家たちの準備金」すなわち「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣だけしかあげられていない。なぜ、マルクスがここで「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣をあげていないのか、ということについて三宅教授はつぎのようにのべられている。

「なお産業資本、商業資本はその回転において、種々の原因から、貨幣形態で一時的に遊休する資本が生じるが——利潤として還流してきたがまだ投下されないでいる貨幣資本もこのなかにふくまれる——、これが右蓄蔵貨幣の「第二形態」と呼ばれている。かかる、貨幣形態で充用を待っている就業していない資本の保管もまた、貨幣取扱業者の手によつて行われることになるが、これを、マルクスは右のようにここ——信用制度形成の第二として述べているところ——に挙げていない。そのわけは、か

かる貨幣資本の保管——これを貨幣取扱業者は、貨幣取扱業者たる資格においては、たんに保管することとまるが——は、つぎの利子生み資本としての管理にすぐ結びついているということによるのであろう」（講座『信用理論体系』、I、三宅義夫稿「第一章 概説——信用理論の体系」三五ページ）。

四

第二節および第三節においては、信用制度のもとにおいては、なぜ蓄蔵貨幣が銀行に集積されるのかという問題を、銀行は貨幣取扱業者たる側面をもっている、ということと関連させて考察してきた。そして、銀行が一面において貨幣取扱業務をおこなうことによって銀行に集積される蓄蔵貨幣は、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣であるということ、銀行が貨幣取扱業務をおこなうのは、産業資本や商品取扱資本の循環において購買手段および支払手段の準備金として機能している貨幣資本である「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣を集積し、共同的に管理することによって、その一部分を「遊休貨幣資本」たらしめ、銀行が自由にしうる貸付可能な貨幣資本に転形するためである、ということについてのべてきた。

そこで、第二に、銀行は利子生み資本の管理者として貨幣に利子をつけて預かり、これをより高い利子をつけて他に貸付ける、すなわち「貨幣の借入と貸付」を本来の業務とするということと関連させて、なぜ銀行に蓄蔵貨幣が集積されるのか、という問題を考察してみよう。

「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣が銀行に集積されるのは、前節においてのべたように、銀行が貨幣取扱業務をおこなうからである。したがって、ここで、検討されるべき資本制生産のもとにおける蓄蔵貨幣は、「蓄蔵

貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣である。

「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣の具体的な「資本形態」は、(一) 固定資本の減価償却基金、(二) 「新たに蓄積された未投下貨幣資本」、(三) 「遊離貨幣資本」である。これらの「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣の「資本形態」のうち、その(一)および(二)は、資本の再生産過程における必然的契機にもとづいて形成され、(三)は、一定の諸条件のもとにおいて偶然的に資本の再生産過程から「遊離」されて形成される。それらが形成される契機はことなり、またその目的もあいことなっている。しかし、それらはいずれも一時的に失業している「遊休貨幣資本」である。すなわち、(一) 固定資本の減価償却基金は、資本の再生産過程における固定資本の独自の回転によって必然的に形成され、固定資本を現物形態で更新し、填補するためにもちいらるべく規定されている貨幣資本であるが、固定資本の現物形態が更新され、填補されるまでのあいだは、資本の再生産過程から排除され、分離されており、この過程の外部にあって充用をまわって失業している「遊休貨幣資本」であり、(二) 「新たに蓄積された未投下貨幣資本」は、資本制生産の本来の発展形態である拡大再生産をおこなうために、つまり資本蓄積に一時的にもなうところの必然的契機にもとづいて形成され、それは生産の規模を拡大するために充用されるべく規定されている貨幣資本であるが、現実には資本として充用されるために必要とされる大きさにたつまでのあいだは、資本の再生産過程から排除され、分離されており、この過程の外部にあって失業している「遊休貨幣資本」であり、(三) 「遊離貨幣資本」は、一定の諸条件のもとにおいて偶然的に形成され、資本の再生産過程にとって過剰となり、余分となって、この過程から「遊離」された貨幣資本であり、したがって、失業している「遊休貨幣資本」である。このように「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、それが形成される当初において「遊休貨幣資本」で

ある。したがって、産業資本家や商業資本家たちにとっては、この「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣の「資本形態」の(一)および(二)のように、それらは資本の再生産過程における必然的契機にもとづいて形成されなければならないが、しかし、それが「遊休貨幣資本」であるがために、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣を保有しておくことは絶対的に不生産的であり、「それは資本制的生産の死重である」⁽¹⁴⁾。そこで、産業資本家や商業資本家たちは、この失業している「遊休貨幣資本」である「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣を「利潤ならばに収入のために使用されるものたらしめよう」と欲求するであろう。そして、この欲求は「信用制度および『有価証券』においてその努力の目標を見出す」(『資本論』第二巻、S. 504、長谷部訳、青木版六五五―六六ページ)のである。

(14) 「資本家 A、A'、A'' (I) によって直接に生産され取得される剰余生産物が、資本蓄積すなわち拡大再生産の現実的基礎だとすれば、——この剰余生産物は顕勢的には B、B'、B'' (I) の手ではじめてこの属性において機能するのではあるが、——この剰余生産物は、その反対に、その蛹化した貨幣においては、すなわち蓄蔵貨幣、したがってたんにだんだんと形成されつつある潜勢的貨幣資本「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣」としては、絶対的に不生産的であり、この形態では生産過程に並行して、しかも生産過程の外部に、横たわる。それは資本制的生産の死重である」(『資本論』第二巻、S. 504、長谷部訳、青木版六五五―六六ページ、傍点および「」内——引用者)。

以上のように、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣となり、その形成者であるところの産業資本家や商業資本家たちにとっても「遊休貨幣資本」であり、かくして、かれら自身においても「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣を「資本」としてもちい価値を増殖しようと欲求されている。しかし、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、その「資本形態」の(一)および(二)においてよくいいあらわされているように、かれらにとってまったくどうでもよいというような貨幣資本ではなく、またそ

の大きさにおいて事業を拡大するためには、あるいは他の事業をあらたにおこなうためには不足している。だからこそ、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣という形態にあるのである。

ところで、まえにのべたように、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣には、受入、保管、簿記などの純技術的な諸操作が必要とされ、そしてこれらの諸操作をおこなうために流通費である費用を支出しなければならない。

貨幣取扱業が発生すると、これらの純技術的な諸操作を貨幣取扱業者に依頼するために「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣も「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣とともに貨幣取扱業者に集積される。貨幣取扱業者の手もとは、貨幣取扱業務をつづけ、そしてそれが大規模になっていくにつれて、その提供する技術的手段によって「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣の一部分を「遊休貨幣資本」たらしめたもの、およびその形成の当初から「遊休貨幣資本」である「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣が存在するようになる。このつねに貨幣取扱業者の手もとに存在する貨幣を他に貸付けるようになるとき、貨幣取扱業者は銀行業者となる。しかし、銀行は、たんなる貨幣取扱業者ではない。銀行は、一面において貨幣取扱業務をおこなうが、その本来の業務は「貨幣の借入と貸付」である。つまり、銀行は、貨幣に利子をつけて預かり、そしてそれを「借入利子」より高い「貸付利子」をつけて他に貸付ける業務を本来の業務とする。したがって、産業資本家や商業資本家たちは、その形成の当初から「遊休貨幣資本」である「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣を、それにとまなう純技術的な諸操作を代行してもらうために貨幣取扱業務をもいとなむから銀行に依頼するのではなく、利子を取得するために銀行に預けるようになる。こうして、かれらの欲求はみたされることになる。かくして、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣が銀行に集積されるのは、銀行が貨幣取扱業務をおこなうからではなく、銀行が利子をつけて預かるからである。⁽¹⁵⁾

(15) 「資本家が、貨幣がたまるにつれてそれを当座勘定 (Laufende Rechnung) で銀行に預金して利子を与えるばあいは、信用に属する」(『資本論』第二卷、S.115、長谷部訳、青木版一五七ページ)。今日では「当座預金」には利子は支払われていない。

資本制生産の発達と並行して同時に発達する信用制度のもとにおいては、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、利子を取得するために銀行に預けられる。したがって、産業資本家や商業資本家たちは、「遊休貨幣資本」である「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣を、利子生み資本として投じることになる。そして、この「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣を利子を取得するために銀行に預けることは、産業資本、商業資本の運動自体ではないから、産業資本家や商業資本家は、産業資本家、商業資本家という資格において「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣を利子を生むべく投ずるのではなく、貨幣資本家、貸付資本家という資格においてなすことになる。「これは資本制生産の基礎上で必然的に形成される個々の『貨幣資本家』の基本をなすものである」⁽¹⁷⁾。

(16) 「資本制生産の発達につれて、同時に信用制度が発達する。一資本家がまだかれ自身の事業では充用しえない貨幣資本〔蓄蔵貨幣の第二形態〕にぞくする蓄蔵貨幣の一つの『資本形態』である『新たに蓄積された未投下貨幣資本』が他の資本家たちによって充用されるのであって、前者は後者からそのかわりに利子をうけとる。この資本は前者にとっては、特殊な意味での貨幣資本〔独自の範疇としての貨幣資本すなわち利子生み資本〕として、生産的な資本とは別種の一資本として、機能する。だがそれは、他人の手で資本として〔産業資本あるいは商業資本として〕作用する。剰余価値の実現が頻繁となり、また剰余価値生産の規模が増大するにつれて、新たな貨幣資本または資本としての貨幣市場に投ぜられる——そしてそこからすくなくとも大部分は拡大生産のためにふたたび吸収される——割合が増大することはあきらかである」(『資本論』第二卷、S.321、長谷部訳、青木版四一九ページ、「」内——引用者)。

(17) 「そしてこの遊離貨幣資本を利子を生むべく投じるとい、産業資本家、商業資本家は、産業資本家、商業資本家たる資格においてこれをなすのではない。というのは、遊離資本を貸付けることは産業資本、商業資本の運動自体ではないからである。これらの資本家は、その資本を利子生み資本として投じることによって、そのかぎりにおいて、貨幣資本家、貸付資本家たる資格に

たち、かかるものに転化する。——これは資本制生産の基礎上で必然的に形成される個々の「貨幣資本家」の基本をなすものである」（講座『信用理論体系』、I、三宅義夫稿「第一章 概説——信用理論の体系」三七—八ページ）。

三宅教授が「遊離貨幣資本」といわれているのは、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣である。したがって、わたくしが、前稿において「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣の「特殊的形態」としてあげた「遊離貨幣資本」もこのなかにふくまれるが、それは、教授のもちいられている「遊離貨幣資本」とはことなる。

以上のように、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、銀行が貨幣に利子をつけて預かるということによって銀行に集積され、銀行は、これらを自己の責任と計算にもとづいて貸出す。そして「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、ふたたび流通に投ぜられて、銀行から借りうけた産業資本家や商業資本家のもとにおいて産業資本あるいは商業資本として機能することになる。⁽¹⁸⁾

(18) 註(16)を参照。

「大工業および資本制生産の発達に必然的に並行する信用制度の発達につれて、この貨幣〔「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣の一つの「資本形態」である固定資本の減価償却基金として積立てられている貨幣〕は、蓄蔵貨幣としてではなく資本として〔産業資本あるいは商業資本として〕、とはいえその所有者の手ではなく、その利用者たる他の資本家たちの手で、機能する」（『資本論』第二巻、S.177、長谷部訳、青木版三三四ページ、「〔内——引用者〕」。

銀行が自由にする貸付可能な貨幣資本の諸源泉のうち「銀行の貸付可能資本は、銀行に貸付を委託する貨幣資本家たちの預金からなりたつ」（『資本論』第三巻、S.439、長谷部訳、青木版五七二ページ）とのべられている「貨幣資本家たちの預金」とは、産業資本家や商業資本家たちが、貨幣資本家としての資格において利子を取得するため銀行に預けられた「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣のことである。

五

第三節および第四節においては、資本制生産のもとにおける「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣および「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣が、なぜ銀行に集積されるのかということについて考察した。ところで、銀行に集積される蓄蔵貨幣は、たんにこれらの資本制生産のもとにおける二つの形態の蓄蔵貨幣ばかりではない。あらゆる階級の個人的な生活関係から生ずる、単純な商品流通のもとにおいて形成される蓄蔵貨幣もまた銀行に集積される。(いうまでもなく、この蓄蔵貨幣は、資本の再生産過程における契機から形成されるものではない。したがって、資本制生産のもとにおける蓄蔵貨幣ではない。)そこで、本節においては、このような蓄蔵貨幣の銀行への集積について考察することにする。

ここで、あらゆる階級の個人的な生活関係から生ずる、単純な商品流通のもとにおいて形成される蓄蔵貨幣というのは、「あらゆる階級の貯金および一時不用な貨幣」および「あらゆる階級の逐次個人的消費にあてられる所得」というようにいわれているものである。これらの蓄蔵貨幣が銀行にどうして集積されるのかは、利子を取得するためであると考えられる。銀行にこれら蓄蔵貨幣にともなう純技術的な諸操作の代行を依頼するために、これらの蓄蔵貨幣が銀行に集積されるというようには考えられない。つまり、これらの蓄蔵貨幣の銀行への集積は、銀行がおこなう貨幣取扱業務とは関係しないで、銀行がおこなう本来の業務である貨幣に利子をつけて預かり、それをより高い利子をつけて他に貸付ける、すなわち「貨幣の借入と貸付」と関係している。したがって、前節において、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣が銀行に集積されるのは、銀行が利子生み資本の管理者として貨幣に利子をつけて預

かり、これをより高い利子をつけて他に貸付けるといふ「貨幣の借入と貸付」を本来の業務とするからであるというようにのべたが、このあらゆる階級の個人的な生活関係から生ずる、単純な商品流通のもとにおいて形成される蓄蔵貨幣も、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣が銀行に集積されるのとおなじ理由によって銀行に集積されるのである。われわれは、より立ち入って考察してみよう。

(1) あらゆる階級の貯金および一時不用品貨幣

あらゆる階級の貯金および一時不用品貨幣というのは、たとえば、結婚、住宅、養育あるいは老後、不測のわざわいなどにそなえるために貯蓄されているような貨幣である。これらの貨幣は蓄蔵貨幣の形態にある。⁽¹⁹⁾この蓄蔵貨幣は、「個人的蓄蔵貨幣」というようにもいへよう。この「個人的蓄蔵貨幣」は、それぞれの各個人にとっては、一定の期間は不用品貨幣であり、「遊休貨幣」である。したがって、銀行が貨幣に利子をつけて預かることによって、この「個人的蓄蔵貨幣」は銀行に集積されることになる。

銀行は、このように貨幣に利子をつけて預かるということによって、あらゆる階級の「個人的蓄蔵貨幣」を集積することができるが、もちろんこの「個人的蓄蔵貨幣」は、それぞれの個人によって個々別々に保有されているかぎり、とても「それだけでは貨幣資本として作用することのできない」小額なものである。しかし、銀行は、この小額の「個人的蓄蔵貨幣」を大量に集積することによって「一つの貨幣勢力」を形成するのである。⁽²⁰⁾こうして、銀行はこれを貸付可能な貨幣資本に転形するのであるが、これは「銀行制度の特殊な作用」であって、さきにもた「本来の貨幣資本家と借手とのあいだの媒介作用」とは区別して考えなければならない（『資本論』第三卷、S. 439～440、長谷部訳、

このあらゆる階級の貯金および一時不用な貨幣、すなわち「個人的蓄蔵貨幣」は、銀行が自由にする貸付可能な貨幣資本の諸源泉のうち、その第二の後半にあげられているものである。「銀行制度の発達につれて、殊に預金に利子を支払うことになれば、あらゆる階級の貯金および一時不用な貨幣が銀行に預けられる」(『資本論』第三卷、S. 439、長谷部訳、青木版五七二ページ)。

なお、国富が増大するにつれて、たとえば「利子だけで生活できるような元本を祖先の労働によって所有する人々」、あるいは「青壮年期にさかんに働いて引退し、老年期には蓄積したものの利子によって安穩に生活する人」(『資本論』第三卷、S. 395、長谷部訳、青木版五一三ページ、ラムジー「富の分配にかんする一論」よりの引用)などの金利生活者が増大する。

(19) あらゆる階級の貯金および一時不用な貨幣が蓄蔵貨幣の形態にあるということはつぎの文章からもあきらかである。

「労働者が賃銀から貯金するばあいには、……中略……それは、かれが賃銀の一部分を蓄蔵貨幣に転形し、そのかぎりにおいて需要者・購買者・としては登場しないということである」(『資本論』第二卷、S. 113、長谷部訳、青木版一五四ページ)。

(20) 「信用制度の発達、およびそれにつれて社会のあらゆる階級のすべての貯金を、産業家や商人が銀行業者を介してますます自由にできるようになること、およびこの貯金が増えます、集積されて貨幣資本として作用しうるような分量にたつすること——これらのことも利子歩合を圧迫するにちがいない」(『資本論』第三卷、S. 395、長谷部訳、青木版五一三ページ、傍点——引用者)。

(2) あらゆる階級の逐次個人的消費にあてられる所得

あらゆる階級の個人的消費にあてられる所得は、それによって各人が生活するために必要な諸商品の購買にもちいられるが、しかしこの購買は一時におこなわれないうで、継起的に時期をことにしておこなわれる。つまり、個人的消費にあてられる所得は、逐次、漸次的に支出される。したがって、これらの所得の一部分は、一時「日常的消費に予

定された準備金」の形態で各個人の手もとにとどまる。この「日常的消费に予定された準備金」は、いわゆる「鑄貨準備金」であって、それは流通を中断されている貨幣であり、非流通手段の形態にあるから蓄蔵貨幣（広義）の形態にある。⁽²¹⁾

銀行が貨幣に利子をつけて預かるようになると、これらの各個人の手もとにとどまっている「日常的消费に予定された準備金」さえも銀行に集積されるようになる。そして、それらは、銀行に集積されることによって、しばらくのあいだ貸付可能な貨幣資本を形成するのである。⁽²²⁾⁽²³⁾

銀行が自由にする貸付可能な貨幣資本の諸源泉のさいごにあげられている「だんだんにしか消費されないはずの所得も銀行に預けられる」(『資本論』第三卷、S. 439、長谷部訳、青木版五七二ページ)とのべられているのは、この「日常的消费に予定された準備金」、すなわち「鑄貨準備金」も銀行に利子を取得するために預けられるということをいあらわしている。

(21) つぎの文章は、資本家の個人的消費のばあいについてのべているが、資本家にかぎらずあらゆる階級の個人的消費についてもおなじことがいえる。

「*g-w* は、資本家が本来の商品にであれ御自身または御家族のためのサービスにであれとにかく支出した貨幣を媒介する一系列の購買である。これらの購買はばらばらであり、時期を異にしておこなわれる。だから、この貨幣は、一時は、日常的消费に予定された準備金または蓄蔵貨幣——けだし、流通を中断された貨幣は蓄蔵貨幣形態にあるわけだから——の形態で実存する」(『資本論』第二卷、S. 61、長谷部訳、青木版八七ページ)。

なお「日常的消费に予定された準備金」が「鑄貨準備金」であるということについては、拙稿『鑄貨準備金』について(『立教経済学研究』第十二卷、第二号所載)を参照されたい。

(22) 「日常的消费に予定された準備金」、すなわち「鑄貨準備金」が、銀行に利子を取得するために集積されるということは、つ

ぎの文章からも推察することができる。

「銀行制度の拡張の結果として、かつては私的蓄蔵貨幣または鑄貨準備だったものが、一定期間いつでも貸付可能資本に転化されることから生ずるような貨幣資本の膨脹が生産的資本の増大を表現しないことは、ロンドンの株式諸銀行が預金に利子を支払いはじめるとこれらの銀行における預金が増大したということが生産的資本の増大を表現しないのと同様である」(『資本論』第三卷、S. 532、長谷部訳、青木版六九一ページ、傍点——引用者)。

(23) 「所得として支出される部分は、だんだんに消耗されるが、それまでのあいだは預金として、銀行業者のもとで貸付資本を形成する。だから、利潤のうち所得として支出される部分の増大でさえも、貸付資本の漸次的な・たえず反復される・蓄積となつてあらわれる。……中略……だから、信用制度およびその組織の発達につれて、所得の増大、すなわち産業資本家および商業資本家たちの消費の増大でさえも、貸付資本の蓄積としてあらわれる。そしてこのことは、だんだんに消耗されるかぎりでは一切の所得——つまり地代、より高い形態での労賃、不生産的階級の所得等々にあてはまる。これらはすべて、しばらくのあいだは貨幣所得の形態をとり、したがって預金に、かくして貸付資本に、転形されるものである」(『資本論』第三卷、S. 529～9、長谷部訳、青木版七二一—三ページ)。

以上、第四節および本節において、銀行は利子生み資本の管理者として貨幣に利子をつけて預かり、これを他により高い利子をつけて貸付ける、すなわち「貨幣の借入と貸付」を本来の業務とするということと関連させて蓄蔵貨幣が銀行に集積されるということについて考察してきた。銀行のこの側面に関連して集積される蓄蔵貨幣のもっとも重要なものは、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣である。しかし、この面から集積される蓄蔵貨幣には、たんに「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣ばかりでなく、資本の再生産過程にもとづく種々の契機から形成される蓄蔵貨幣ではない、あらゆる階級の個人的な生活関係から生ずる、単純な商品流通のもとにおいて形成される蓄蔵貨幣、すなわち、「あらゆる階級の貯金および一時不用な貨幣」つまり「個人的蓄蔵貨幣」、さらには「日常的消費

に予定された準備金」つまり「鑄貨準備金」までもふくまれる。

「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、第三節においてのべたように、銀行が貨幣取扱業務をおこなうということによって銀行に集積され、そして、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣、および「個人的蓄蔵貨幣」、さらに「鑄貨準備金」は、銀行が貨幣に利子をつけて預かるということによって銀行に集積されることになる。

銀行は、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣を集積し、共同的に管理することによって、その一部分を貸付可能な貨幣資本たらしめるために貨幣取扱業務をおこない、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣、「個人的蓄蔵貨幣」、「鑄貨準備金」などを集積し、これらを貸付可能な貨幣資本たらしめるために貨幣に利子をつけて預かるのである。そして、銀行はこれらの貸付可能な貨幣資本を自己の責任と計算とにもとづいて貸出し、利子生み資本として機能せしめることになる。

かくして、ブルジョアの生産の発達している国々においては、蓄蔵貨幣は「銀行という貯水池」に集積されるのである。

(一九六〇年二月)